

山東京鶴の滑稽本『御室八十八ヶ所四国栗毛』

―翻刻とその版本および著者について― (上)

石川了

一、はじめに

十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』の影響は大きく、刊本・写本を問わず数々の追随作が生まれたことは、すでに尾崎久弥氏「膝栗毛の研究」(同氏『江戸軟文学考異』〈中西書房、昭和三年〉)所収)が指摘するところである。その尾崎久弥コレクション(名古屋市蓬左文庫蔵)中に、膝栗毛物の山東京鶴著『^御八十八ヶ所四国栗毛』(中本二巻二冊、刊本。以下、尾崎本と呼ぶ)が所蔵されており、従来はこの尾崎本以外に伝存本が知られていなかった。また管見の限りでは尾崎氏を含めて、この著作と作者に言及した論がない。

ところで、大妻女子大学にも同二巻二冊本(以下、大妻本と呼ぶ)があり、その版本(原則として、片面二丁彫りの両面彫り)四十四枚分をも所蔵する。照合してみると、尾崎本と大妻本は同版でともにその前篇(版本・版本ともに「前篇」の文字はない)に相当する。前篇分の所蔵版本は都合十九枚(三十八丁分)、欠いているのは版本の「序ノ一」「序ノ二」の二丁分一枚と、表面が「上ノ二十一了」の一枚(裏面の内容は不明)、それに「下ノ一」「下ノ二」の二丁分一枚で、この都合三枚(六丁分)の版本がない。

右の十九枚を差し引いた残る版本二十五枚は、その後篇二巻二冊に

相当するものである。前篇二冊目末尾の御室三十九番目茶所で、「コレサおめへ(繁八を指す)がそのげびつ(飯櫃のこと)のふたをとつてはちをかいてしもふては。四国栗毛の二へん目の幕あきにねうちがねへはナ」と言う昌六のセリフや、「これより此げびつのふたをとりて。しげ八。はちかきしおかしみ。この茶所にて一宿の滑稽。さてまた五十三ばん。円明寺くさりのだんの晒落より。近江屋酒もりのだんなど。ことごとくおもしろみを穿ちて。後へんにいだし申候」といった記述は、確かにその後編(第二編)の予告である。しかし単なる予告にとどまって未刊に終わったのではなく、その版本が残っているのであるから、その版本は伝存本の所在が確認できないものの出版されていたに相違ない。

後編二巻二冊の版本丁付を示せば、「序ノ四」(オは序文でウは口絵、「上ノ二」(内題「四国栗毛後篇卷之上」)と「上ノ廿四」(七ウ・八オ挿絵、十八ウ・十九オ挿絵)、丁付ナシ(オに尾題「四国栗毛卷之上終」、ウ半丁は無彫刻)、「下ノ一」(内題「四国栗毛後篇卷之下」、三ウ・四オの各上半分挿絵)と「下ノ八」、「下ノ十一」(「下ノ廿三」(十一ウ・十二オ挿絵、十八ウ・十九オ挿絵、廿三オに尾題「四国栗毛卷之下大尾」、同ウから跋文)、「下ノ廿四了」(跋文)、丁付ナシ(これが収まる版本一枚については、片面はオウで計二十行分の野のみが彫られており、もう片面は無彫刻)である。欠けている丁は「序

「三」までと、「下ノ九」「下ノ十」ということになる。

二、前篇翻刻

前篇が二部確認できたので、大妻本を底本として尾崎本を参照しつつその全文を翻刻する。

凡例

- 一、漢字は通行の字体に改めた。
- 一、片仮名表記のうち、副詞・感嘆詞・終助詞および意味のあるものはそのままとし、それ以外の「ミ」「ハ」「二」等は平仮名に改めた。
- 一、セリフの始まりを意味する記号「」はすべて、「」を代用した。
- 一、丁移りはその末尾に、丁付才または丁付ウの形で括弧内に示したが、行移りは無視した。
- 一、原本二行書きの部分については、左記の措置を施した。
 - ア、「上ノ十五才」に一箇所のみ句点「。」がある他は一切の句読点がないので、私に読点「、」を施した。
 - イ、「下ノ六才」における漢文は原本の一行目が繁八のでたらめな訓読文、同二行目が対応する原漢文となっているが、その一行目の末尾に二行目を「」内に翻字し、いずれも通常文字サイズで一行に組んだ。
- 一、誤刻・脱字と思われる箇所にはその右側に「(ママ)」と付したが、漢字に付されたルビおよびルビの付いた漢字そのものが誤刻の場合には当該漢字の下に、また二行書き部分の誤刻・脱字においては当該文字の下に、それぞれ「(ママ)」を付した。
- 一、版木に入木等手が加えられている文字は、破線の四角で囲んだ。
- 一、原本に不適切な用語があるが、資料としてそのままとした。

御八十八ヶ所室四国久利毛 上 (尾崎本原題簽)

眉言朝式暮四(関防印)

周礼曰。我名をさしておれといへば。妾をさしてかれといひ。女房に向つてこれといへば。老年を誘てばれといふ。しやれ又何ぞはなれんや。といへり。嗚呼人と(序ノ一才)して。誰か洒落を好まざらん。雖。然。酒に下戸あり。洒落に野夫あり。余がごときの不通人。豈亦洒落をよくせんや。洒落は一言も吐けず。酒は半分も飲ず。下戸なり野夫なり無芸也。(序ノ一ウ)しやう事なしの山巡。御室八十八ヶ所の。洒落に似よりのてんごがき。書肆の需といひながら。いと恥しき事なりと。作者誤てをんしやれもふす

戯作者 山東京鶴印(印文「澄/成」)(序ノ二才)

(口絵Ⅰ(序ノ二ウ・序ノ三才)・口絵Ⅱ(序ノ三ウ))

御八十八ヶ所室四国栗毛上之巻

山東京鶴 戯作

弓は提灯につき。鉄砲はすへ風呂の中にかくるゝとは。むべなるかな。兜は蟹が名にのこり。鎧は海老が身にちやくす。四のそのなみをだやかに。をさまる御代のしるしとて。所々に神社の御造営あ(上ノ一才)れば方々に仏閣の御建立あり。そがなかにいとくとふときは。洛西御室山なる八十八ヶ所なり。靈験あらたにましまして。諸願ことごとく成就せざるはなく。現安後善の霊場ゆへ。老たるとなく。若となく。八兵衛となく権介となく。さんけい日々にいやまして。その仏徳ぞありがたき。ころしも卯月のはじめつかた。ことさら(上ノ一ウ)ながめのにしの野辺。雲雀の空にさへづるは。姑に似て喧ましく。蛙の池になき出すは。赤子のごとくかまびすし。蛙の碎玉花の紅なるは。嫁子が春着のうらを欺むき。土手の土筆のしろくたけた



〔口絵Ⅱ（序ノ三ウ）〕



〔口絵Ⅰ（序ノ二ウ・序ノ三オ）〕

浮世画工
菱川師保筆

清晴事
菱川師保画

るは。娘子が懐中の白粉筆かとあやまたる。麦は青くして蒼海の波をなし。黄花は黄なして黄金の山をつくるに。手を（上ノ二オ）むなしくしてあらんより。御室へさんけいせんものと。まかり出たる二人連昌六、これもなまじきいた風なれども、大小はきくず一刀にて、繁八より少しとよりきたる昌「コレ繁公あまりはいじやねいか。日はながいにしづかにいきねへナ繁「ナニ駱駝のねり供養じやあろめへし。そんなにしづかにあゆめるものかトのをと、耳もとにてどんときこへる、二人はまことに驚き昌「繁（上ノ二ウ）公今のはなんだ。大そうな音だが。日がみなりか繁「なるほど日雷だかしきりに焔硝くさくなつた。おめへへそはあるか昌「イヤ臍はなくとも。へそのしたさへあらばいゝが。だいぶちぎこんだ繁「なるほどでへぶ。おめへの鼻のしたは昌「へらぼうめ。へその下がちぎこんだとして。はなのしたのがのびるも（上ノ三オ）〔挿絵①（上ノ三ウ・上ノ四オ）〕のか繁「イヤのびんともいへねへぜ。引こんだところがあれば。のびるところが有が。天地自然の道理だ昌「コノばんくるはせめ。人を石亀のやうにおもつてけつからトふとするひやうしに、たこの小べん繁八のあしへかゝると、繁八大にはらたてやつきとなつて繁「このちくしやうめ。目はみへねいかトつきとなつて昌「ちくしやうとは（上ノ四ウ）なんのこつちや。おら百姓じやが繁「これややい。ちくせうと百姓とあまりのいた中でもねへはへ。てめへたちのやうに。稗の雑炊や麦めしくらつて。すりこぎとはちがふぞよ。はばかりながら。拜みづきの米をくらつて。お膝もとでおそぢななかつた。まぐれかくれの江戸ツ子さまじや昌「おま（上ノ五オ）いがたが江戸ツ子じやとて。おらおそれるものか。サア畜生の垢ぬきしてもらふかい。其うへ稗の雑炊くっているとどうした事じや。おらたちは牛や鶏にでも。そんなものは食しやせんぞよ繁「ヲ、うぬらがかつておきやがる。鶏や牛には稗の雑炊もすぎらア夫だから京近在の鶏は粉糖（ママ）くをふと啼やがるし。牛（上ノ五ウ）はひもじいと吼やがるはトむかふが百姓しやとおもふゆへ、あくまでの、しる折しも、こなひゆへ、びつくりしてにけ昌「アハ、、、これはおかしい。をまい江戸ツ

〔挿絵①（上ノ三ウ・上ノ四オ）〕



尾上梅幸
臍の背
に
つきや雉子
の
ゆくりなく

子ではないか。蛇ぐらいに恐れてにげるとは。ままよ小便かけたも
了簡しなせトゆへ昌六はこらへかね昌「ヤイ百姓てめへはこの男の
筋目をしらぬゆへあなどらアこの男は世上に名高い。天竺徳兵衛の
末孫だは。それ（上ノ六オ）だからくちなはには恐れるのだ昌「ハ
、、、これはおかしい。天竺徳兵衛の末孫じやによつて。今でもこ
の人は定めし天竺浪人じやあるトしだいなふりかけるゆへ、もはや
ひやくせうりやうけん百姓了簡してやるは。だまつて立され昌「百姓「イヤ了簡はならんは
百姓了簡してやるは。だまつて立され昌「百姓「イヤ了簡はならんは
い。武士たるもの、足へむけ。小便かけたがあやまりなら。あやまり
にして。畜生の垢ぬきしても（上ノ六ウ）らをふかい昌「そりやア
もつともだが。今さら畜生をいひ直して。けだものといつた処がお
つなものだし。ヲ、そふだ。てめへは鳥るい昌「いや鳥るいも

畜類も同じことじや昌「りくつは同じことだけれど。鳥類ばかり
はのがれんよ。なせといつてみな。てめへは元来小便とりだはアハ
、、、ト昌六とりあへず、
昌六とて、
昌六とて、

ほとゝぎすきよに北野、百姓が（上ノ七オ）

野にをくこへの小便かけたか
かく打興じつ。伊賀屋舗のわきを御前通へ出ると。こゝに延命寺
といへる地藏堂あり。このころの事ゆへ。せつたいといへる札をかけ
て。としのころ二十ばかりのいとうつくしき尼。茶をたいている昌
「せつたいせつめい一トやすみとはどふだ昌「おさまらねへしやれ
だ（上ノ七ウ）せトながら尼のうつくしきにころをかけ昌「コウ尼御前おめ
へいくつになりなすへトしうつむいて昌「モシ尼御前もう何どきだ
昌「らん丸さんがきいてあきれらア昌「おどけなしにモウなんど
きだナトとへど、尼はこたへなくして唯繁八昌六が顔をぢりりとみし昌「ちやの下がく
すぼるなら。わつちが焚てあげやしよト立よらんすると、昌六もすかさず立より、
か、尼のしりを一寸つめると、尼はわつと
（上ノ八オ）いふて彼方へとにげ入昌「これおまいがたはあのつんぼの尼をつか
まへて。何をなさるのじやたわいもないト互にかをみあはせ昌「こりや
又きつい迷惑だ。なにもてんがふはせねわい。あの尼子のしりに蜂が
くつゝいていつたによつてもしやかみなどしたら気のどくじやと思つ
て。をとしてやつたがどうした昌「わつちもあの尼子のほうべた
（上ノ八ウ）にやぶ蚊がくつゝいていつたから。ころしてやろうと思
つて。立よつたのだは昌「きつひおせわじや。この寺内にてはたと
へのみ蚊にせよ。殺生はなりませんと内へいる昌「エ、ばんくるはせ
め昌「くそがきいてあきれらア昌「こふもあろふか
我恋をかへ給へといのらしな
石できぎみし地藏そんには（上ノ九オ）
是より兩人は。御前通を北へさし。たどりゆくに。むかふより二八
ばかりの娘こしもとを一人つれ。天神まいりのもどりとみへ。こな
たへと出来るを。兩人はぢろりとみて昌「ほんとにありがたいぜ
昌「こしもとはいゝが。あしもとがすこしわるひ昌「めもとに愛が

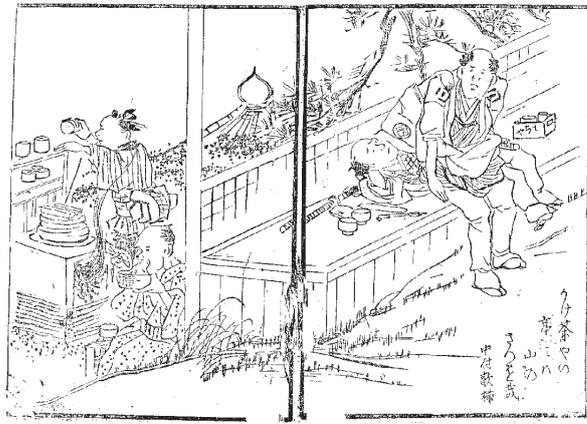
あつて。口もとにえくぼがあらアト（そめまかけると、かの娘はかを、あかくて、思はずしらすつづくひよしに、ふと（上ノ九ウ）ころよりのべがみこちる）「おつとあぶねい御意しづかにト（かけこへしなながら、ふと）に娘は行過る（この間）「なんと昌公うらやましいか。かたじけなくもこの御紙には。蘭の香気があるてナト（ひひつ、かのかみを匂ひ）「ヤア〜大変だ〜。このにをひのわるいといふは。こりやたまらぬ〜」昌「アハ、〜、そりやまた繁公つけたは。今あの紙をひろふ事は。わつち（上ノ十オ）もよくしつてはいるけれど。かのかみがこきたての犬のくその上へむけちつたから。しよ事なしに。みがしたのだけは。それをごぞんじなくて。おめへはおころしづかにとことばをかわして。をひろひなすたのだアハ、〜、繁「エ、こりやたまらぬ〜」。先には足に小便をかけられる。今はまたてにくそのついたかみを持ちなり生ながら（上ノ十ウ）あしをくそと小便のあへものとは。どうよくだぜ」昌「おめへかなしく思ふも尤もだが。大かたそりや大師さまが繁八にはまいるなとをしやるのだあろう。おめへなんぞ大師さまのばちをかふるやうな事。した覚はねへか」繁「まてよヲ、そうだ。大師さまのおいかりをかふるおぼへなきにしもあらず。この十日ほど前（上ノ十一オ）（挿絵②（上ノ十一ウ・上ノ十二オ））だつけ。六角通のみぞへむけ。小便をしやうとおもふた所が的がはづれてはからずも表具屋のかんばんに。小便をおつかけたは昌「ナニおめへそりや弘法大師さまじやねへ。達磨大師さまだは昌「ヲ、そうだつけ。表具屋のかんばんは達磨大師だ。しからばなんにも覚はねへてナ」昌「まづ何にしるウ手足をあらひねせへト（昌六のすゝめに（上ノ十二ウ）より、昌八はこなたの百せう家について）繁「モシおかみさん御面どうながら。足を一寸すゝがしてをくんませへ」昌「おやすいこつちや。むかふの井戸はたに鹽があるさかい。それをおつかいなされ」繁「はい〜ありがたうト（かの井戸はたのたらいにのみをとり、水にうつる我かを、つく〜とみて、あしもあらはず靜をなしたり眉毛につば付た）繁「みりなどして、うつくぬかしているうちに、たらいのそこがぬけると、繁八めからぬ顔して」昌「みづたまらねば足もあらへず」昌「ヲヤ〜しやれどころ（上ノ十三オ）じやねへ。人さまの大事のたらいのそこをぬいて。早くわび事をしねへか」女房「これこの人はけしからぬ」繁「けしがからけれや。生姜や



〔挿絵②（上ノ十一ウ・上ノ十二オ）〕

市川登升
つらつきに
似ぬをろかさや
慕

とうがらしはかぶを売て。うらだなへ引こむは女房「とほうもない事をなさつた。こちの人がもどらんすと。しからしやんすがな」繁「イヤわつちが全くるるきにあらず。此足めがとかくびん〜しよりまして。（上ノ十三ウ）をりふしは人さんの御きげんをそんじる事でごせへすが。さて〜あしのいゝ子ぶるもこまりはてやす。しかし足とたらいとは随分相性はいゝが。なぜ又こんなそこがぬけたらう女房「あほらしいあしとたらいに相性があるものか」繁「いやないともいへねへ。足がすりこ木の木性なら。鹽は扱（ママ）水の水性。たとへをとつていへばわれ（上ノ十四オ）なべに。とぢふたのりくつ昌「なんとかみさん合点か〜」女房「をまいがたはたらいのそこを抜た上に。わしども茶にするのか。きかないぞ〜」昌「しかし茶に



〔挿絵⑤（下ノ八ウ・下ノ九オ）〕

「わるいしやれだ。わつちがみたては。まづ家はしい昔に似て蔵はきりみのごとく。樹木はあをみと見へて。そらとぶとりを。すひ口とみるとはどうだ」**繁**「ばかぬかせ。京の町を菓子椀とは。まづい〜」**昌**「まづくともい〜。一わんくひてへ。大そうはらがちいさくなつた」これより二十一ばん大竜寺二十二ばん平等寺にもふできて二十三ばん薬子（下ノ八ウ・下ノ九オ）王寺にいたる。この下に開山といふ小やまあり、名山なり

すりばちをふせたるごとくみゆるのは

こゝもびせんに名あるおかやま

これより二人は。二十四ばん東寺。二十五ばん津寺。二十六ばん西寺。二十七ばん神峰寺。としだいにさんけいなし。やがて二十八ばん大目寺。といへるへもふでけるが。この処より小倉つゝみ見へて。いとほれやかなるところ（下ノ九ウ）なれば。幸こゝのかけ茶屋にい

かけ茶やの
亭主は
山の
さつを哉
中村歌柳

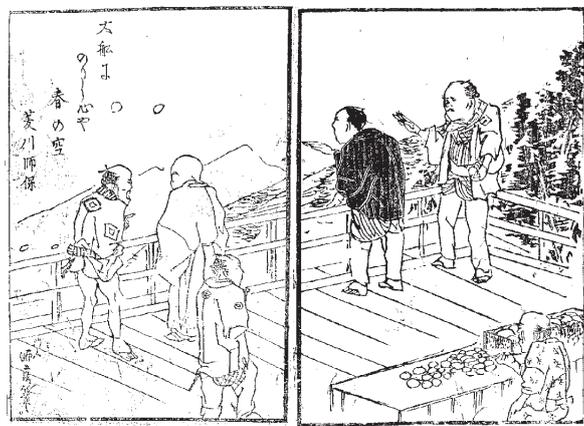
つてやすむ。そのとなり。真の江戸ッ子二人連にてやすみいる**江戸**「これかみさん茶をいま一つくんせへト茶をのみながら、繁八昌六」**江戸**「モシおめへかたも江戸でござへすかト」とはれて、二人はかき見あはせ、むかふが**昌**「さよふさ」**江戸**「わつちも江戸でござへすが。おめへがたはどの辺だナ」**繁**「につぼん橋さ」**江戸**「ナ二につぼんばしといつちや。江戸（下ノ十オ）にはねへ。にほんばしだらうト」なりと思ひ、そろくなぶりかけ**江戸**「こちらの御連はどの辺だナ」**昌**「わつちやひものまちでござへやす**江戸**「ハテナひものまちといふも。江戸にはねへ。ひもの丁だらうト」いわれて繁八昌六はまじめになり、なんでも江戸ッ子をつかふ**昌**「さやう〜しかしわつちどもは。とんかく上がったことばがならひたつて」**江戸**「イヤこりやとんちきだ。ならひたつてとは（下ノ十ウ）おさまらねへ。おめへがたは江戸の衆ではねへはへ。定めし奥州辺だらう」**繁**「イヤしんに生国関東なれども。あの男はこのごろひつけにて鼻の工合がわるく。それゆへの四国でござへす。不便なやつだとおぼしめせト」繁八はじぶんばかりとをうとするゆへ、昌六大に腹を立、**昌**「ヤイ繁八をのれはいまア友達のよしみもないがきじや。そないにおれが事を。（下ノ十一オ）わるふいへば。これからわれがことも。みな白状するのじや。モシ江戸のおかた。わしがいふことを一ト通りをきくなされ。元来あのをともわたくしも。ひがしといふたらおかげまいりの坂むかひに。けあげまでさんじたばかりでムリ升けれど。兎角生れついで。きいた風がすきゆへ。かやうにはじをかきます。あのおとこの大小さいたも。元（下ノ十一ウ）が町人のことゆへ。あれごろうじませ。鬮の打首みたやうに。びつこ〜といたし升ス不便なやつじやとをぼしめせト」白状すると、繁八は大にみつかふとするを、江戸の男のあいさつに、**昌**「繁さんこれから又江戸ッ子だぜ。元来あんなに真の江戸ッ子がけつかるから。すでにおめへと絶交しようとした。ハ、ハ、ハ、時にこうだ」

江戸ッ子はへどつこなるぞ我々を（下ノ十二オ）

くちからはいたごとくぬかした

これより二十九ばん国分寺。三十ばん一のみや。三十一ばん五台山。

三十二ばん 禪師峰寺。三十三ばん 高福寺。三十四ばん 種磨寺。三十五ばん 清滝寺。三十六ばん 清竜寺。としいく にさんけいなし。三十七ばん 五社といへるにいたるに。こゝに土器なげありて。大ぜいの人。かわらけをなげている。繁「ナニあの(下ノ十二ウ) 輪をくゞらすが上手か。昌「そふと見へやす。繁「ヲヤこのあねさんは。きついでこうものだ。みな輪をぬけらアト。繁「見とれているうち、このかわらけやのぼゞが来りて、あたかも飛鳥のごとくなり、またそれくゝに名をいふてなげけるが、或は木のほのぼゞをちるごとく、鐵はかすみのたなびくがごとし、のちには土器をまひりてに投て。これをなづけて夫婦かわらけトいふと、このそばに「いしや」をなごの。かわらけとばかりいへばえいに。夫婦かわらけといふから。男もつぐが男のかわ(下ノ十三オ)〔挿絵⑥(下ノ十三ウ・下ノ十四オ)〕らけとは。語をなさんて。あゝ俗人といふものはト六はおかしく思ひ。繁「あの医者もばからしい。いゝ年をしてト者きて、医「いしや」こりやおまへかた何をいふ。拙ははゞかりながら。傷寒論二十五卷ながらそらんじた。太田了竹の後胤。太田物竹と申ものでや。繁「なるほど物竹さまゆへ。やぶでござへすナ。昌「美女の尻目と貴老のヒとは。大そう人をこ(下ノ十四ウ)ろすであらう。いしや「イヤ尻はころしても。人は殺さず。虱はたすけても。人はたすけず。まことに温順の。君子じやて。繁「ハ、ハ、ハ、こんな人にあいてになつては。おさまらねへ。どりやわつちらも一ト投して。衆人の目をおどろかせてやろうト。かわらけを十枚ばかりかふてなげる処が、とんと工合よく。繁「こいつはなげるよりぶちわるが、いかず。繁八大いにかんしやくを起し。昌「二枚なげしを、こゝんく打つけると、(下ノ十五)かんしやくなどをさまらアト。オ。かわらけはこみじなる、山上の事ゆへ風はげしくして、かの土器の粉。昌「あいた、ハ、ハ、ハ、ト。目をおさへると、このそばに「そばの人」さか昌六の目に入る。昌「これはありがたうト。てはしかりますト。たばこ人をかすと、昌六は目をかたてに。昌「これをありがたうト。たばこ人のを。昌「あいた、ハ、ハ、ハ、これはまたなんたる事だ。この緒をあて(下ノ十五ウ)るやいなや大そういたくなつて。たまらねへ。繁「おめへそれや田葉粉入の口があいて。たばこが目についたのだアハ、ハ、ハ、昌「わらひ事だねへ。いたくてならねへ。繁「ぐわ



〔挿絵⑥(下ノ十三ウ・下ノ十四オ)〕

大船のりし心や
春の空

美川師保

門人師房筆

んらい風がふかねば。おめへそのくるしみはあるめへに。風が敵の世の中だはへ。昌「ア、かせにうらみはかずくござるとは。よくいつたナアト。これをかりたる人にかやひ。昌「こふ目がいたく(下ノ十六オ)てはとてもあるかね。もう日もにしに入らア。このあたりに一宿するところはねへか。繁さんき、合してくんせへト。たのむゆへ繁八はかわらね。昌「モシばゞさんこゝらで。とまるところはねへかナ。ばゞ「ハイこのさきの三十九ばんめの茶所をたのみなさんと。ずいぶんおとめなされます。昌「しからばその三十九ばんまで。はやく繁さんゆくめいかト。二人はこゝを立出て三十八ばん(下ノ十六ウ)遊駝。繁「モシ和尚さん二人連でござへますが。大そう草臥ましたから。こんばん一夜おとめなすつて下さりますことは。なりますめへかナ。和尚「イヤ男の人をとめますこ

とは。きんぜいでござります〔繁〕「こいつはとんちきだ。道成寺のうらがきているわへ。なぜまた男は禁制でござへすナ〔和尚〕」ハテ女の道かあるけいでおこまりなざるを。と〔下ノ十七オ〕めまはすは功德になりませうが。くつきやうな男のをかたをとめまはすは。なにも功德にもなりませう。かへつてこの方の欲心のようにあたりませうゆへきんぜいと申あげましたのでり升ス〔繁〕「なるほどそのを、せ至極もつともだ。実はつれの男が俄に目をいためて。こまりきつていやすゆへ。一宿をおたのみ申事だてナ。もしおとめなすつてくださる〔下ノ十七ウ〕うなら。まことに莫大の功德でござへす〔和尚〕」そんなら今宵はおとまりなされ愚僧は下の茶所まで用事があるから。幸のことじや。おまへかたにるすをたのんで。一寸出てまいりましよ。モシおつれのこちらへ。をはいりなされませト〔和尚は出て行、繁八目六は足をはらふてうへ、あかる〕
〔繁〕「昌さん目はどうだ〔昌〕」でへぶよくなつてきやしたが。はらがまことにきた山だ。〔下ノ十八オ〕この和尚がはやくもどれば。茶づけなどふれまつてもろうに。あやにくおせいぜ〔繁〕「ウン時にあれなるはげびつではねへか。わつちは一寸ト〔昌六是をとぐめ〕」
〔昌〕「これ繁さんそのふたをとりなすな。またはちをかくもんだ。よしにしな〔繁〕」テモ天のたまものだは。はぢをかいてもまゝの事よ〔昌〕「コレサおめへがそのげびつのふたをとつ〔下ノ十八ウ〕てはぢをかいてしもふては。四国栗毛の二へん目の幕あきにねうちがねへはナ。あけてみぬさきの玉手ばこ。和尚がもどるまでまちなせへ〔昌〕」
これより此げびつのふたをとりて。しげ八。はぢかきしおかしみ。この茶所にて一宿の滑稽。さてまた五十三ぼん。円明寺くさりのだんの晒落より。近〔下ノ十九了オ〕江屋酒もりのだんなど。ことごとくおもしろみを穿ちて。後へんにいだし申候。何卒御評判よろしく御一らん。ひとへにく奉希上候

四国栗毛卷之下終〔下ノ十九了ウ〕